

ISSN 0918-1385

THE ROOF

郡山市立美術館ニュース ザ・ルーフ

2008.11.14 Vol.33

久留米藩士入植130周年記念 石橋美術館所蔵名品展 —海の幸—青木繁と久留米の美術



青木繁《海の幸》1904(明治37)年作(重要文化財)石橋財団石橋美術館蔵

久留米藩士入植130周年記念

石橋美術館所蔵名品展

—海の幸— 青木繁と久留米の美術



古賀春江《素朴な月夜》
1929(昭和4)年作
石橋財団石橋美術館蔵

1978(明治11)年11月11日、国営安積開墾の第一陣として、旧久留米藩士が郡山・安積地方に入植しました。安積開拓には、9藩の士族が入植しましたが、中でも旧久留米藩士は141世帯585人と最も多かったのです。入植した藩士は刀を鋏にもちかえて、安積の地の開墾を始め、郡山市の近代化の基礎となった安積野の開拓に大きな役割を果たしたのです。これが縁となり、1975(昭和50)年8月には、福岡県久留米市と郡山市とは姉妹都市の提携が行なわれ、郡山市立

美術館では今年まで「青木繁記念大賞公募展」を開催していました。

そこで2008(平成20)年は、旧久留米藩士族の入植130周年にあたりまずので、それを記念して当館では、久留米市の文化を象徴する石橋美術館の所蔵名品展を開催します。

石橋美術館所蔵作品の基礎となっている石橋コレクションは、株式会社ブリヂストンの創業者、石橋正二郎(1889~1976)が1930(昭和5)年以来長年にわたり収集した珠玉の美術品です。その優れた収蔵品の数々を一般に公開する目的で、1952(昭和27)年、東京にブリヂストン美術館が、1956(昭和31)年には石橋正二郎の故郷である久留米市に石橋美術館が建設されました。この2館は我が国の美術振興におおいに貢献しています。

特に久留米市は、青木繁、坂本繁二郎、古賀春江こがはるえという、日本近代美術を語る上で欠かすことのできない3人の巨匠を輩出しました。そこで、石橋コレクションの中から、青木繁の《海の幸》(重要文化財)をはじめとする上記3人の画家たちを中心に、久留米市を代表する作家たちの作品を加えた72点により、郡山市民に久留米市近代美術の粋を紹介し、さらに一層久留米市と郡山市との縁を深めることを目的として、展覧会を開きます。なお、これにあわせて石橋美術館では、当館のイギリス美術コレクションなどを展示する「ノスタルジア11.11 郡山市立美術館のイギリス美術」展が開催されています(報告は6頁)。

実は、こういった石橋美術館のコレクションの中には、当館が誇るイギリス美術コレクションに関連するものが多くあります。坂本繁二郎は、師の森三美からイギリス美術を学び、その初期の作品にはコンスタブルやターナーの影響がありあり

久留米藩士入植130周年記念
石橋美術館所蔵名品展
—海の幸— 青木繁と久留米の美術

会 期：2008(平成20)年11月1日(土)～12月14日(日)
毎週月曜日休館
(11月3日、24日は開館、11月4日、25日は休館)
開館時間：午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
会 場：郡山市立美術館企画展示室
主 催：郡山市立美術館、石橋財団石橋美術館
観 覧 料：一般800(640)円、高校・大学生500(400)円
※()内は20名以上の団体料金。中学生以下、
65歳以上、障がい者手帳をお持ちの方は無料。



坂本繁二郎《放牧三馬》
1932(昭和7)年作
石橋財団石橋美術館蔵

講演会

「石橋コレクションの洋画 青木繁と久留米の画家を中心に」

講 師：植野健造氏(石橋美術館主任学芸員)
日 時：11月9日(日)午後2時から
場 所：多目的スタジオ(入場無料)

特別ギャラリートーク

講 師：森山秀子氏(石橋美術館学芸課長)
日 時：12月7日(日)午後2時から
場 所：企画展示室(企画展観覧券が必要です)

美術講座:クローズアップ・「海の幸」

講 師：当館学芸員
日 時：11月22日(土)午後2時から
場 所：講義室(入場無料)

ギャラリートーク

講 師：当館学芸員
日 時：11月8日(土)、29日(土)午後2時から
場 所：企画展示室(企画展観覧券が必要です)

と見られます。また、青木繁は当時の雑誌や美術評論家岩村透が所有していた洋書などで、ラファエル前派の、古典や歴史などからの題材の選び方から作品の構図、そして人物のポーズなどまで詳細に研究していたことがわかっていきます。ですから、今、久留米市に展示されている当館のコレクションを思い起こしながら今回の展覧会をご覧になられると、青木繁や坂本繁二郎の新しい側面を発見できるかもしれません。

なお、常設展示室では、久留米市関連として、青木繁が口絵を描いた『春鳥集』(蒲原有明著、明治38年)や、坂本繁二郎の『日本風景版画 第六集 筑紫之部』(大正7年)、古賀春江の油彩画《蝸牛のいる田舎》(昭和3年)、吉田博の木版画も展示されておりますので、あわせてご覧ください。(当館学芸員 菅野洋人)



青木繁《わだつみのいろこの宮》
1907(明治40)年作(重要文化財)
石橋財団石橋美術館蔵

同時開催

風土記の空 郡山市内の中学校美術部による作品展

毎年夏に開催している郡山市内の小学校による「風土記の丘の美術展」(今年の第7回展は7月21日から8月24日まで開催)に続いて、「風土記の空」を今年初めて開催します。この展覧会は、中学校美術部・文化部等に在籍している生徒の作品等を展示し、美術作品を鑑賞する場、生徒同士が交流する場として、美術館と中学校との連携の活性化を目的としています。

会 期：平成20年10月28日(火)～12月14日(日)
会 場：美術館ロビー
参加校：郡山市立蓬瀬中学校、郡山市立郡山第二中学校、
郡山市立緑ヶ丘中学校、郡山市立宮城中学校



不器用な小道具たち

演劇実験室◎万有引力特別公演

100万光年の彼方劇Ⅱ劇的小道具序説

山口郁生



「寺山修司の衣鉢をついだ」演劇実験室・万有引力の公演は、日没の野外で始まった。入場時二百余名の観客は、理由も知らされぬままに二手に選別される。実は、これが最初の大きな仕掛けで、二手に分かれた観客は会場を延々と巡りながら、見るものと見られるものの、個と全体、つまり主体と客体の関係を、自分たちで炙り出す小道具群となるのである。

作者J・A・シーザーは言う。「芝居に於ける小道具とは俳優の精神世界以外、舞台の時間空間に置かれる道具類のことである。それには俳優の肉体をも含む」と。そう、この演劇の中では全てのもものが、作者に操られる小道具類の群れなのだ。芝居の安全な傍観者のつもりで僕たちも、芝居の中程までその事に気が付かない不器用な小道具だ。それに比べ、他の小道具たち

はもっと規律正しい。マツチ、照明装置、音響設備、そして持参した懐中電灯、それらは意志を持たないから、僕たちよりは安定しているのだ。芝居は全ての小道具を巻き込みながら相互連鎖の結果、僕にイライラと不安を与え続ける。知らぬ間に小道具になってしまった観客は、意志は持つが舞台にいないから自分で芝居の進行をコントロールできないのだ。だから、ものすごく不機嫌だ。

演劇の中盤に、二手に分かれた観客たちが対峙し、芝居の中で自分たちも小道具だったことを自覚させられる圧倒的な場面が訪れる。それは目隠しを解かれた瞬間の出来事で、「もしかして、客のつもりが俺たちも小道具だったの?」と、気が付いた途端、芝居のスピードは加速する。観客Ⅱ小道具は、俳優と音楽に煽り立てられながらたみこまれる様に、化粧をされ、ポーズをとらされ、台詞を与えられ、自発的に踊りだす人さえないのだ。このクライマックスは、美しい音楽と相まって何しろ気持ちがいい。これは、不安から開放されたカタルシスなのだろうか。それにしても、僕たちは演劇の中であまりにも不器用だ。





普段の生活で、人は自分の主観を頼りに社会と対峙している。そして、主体と客体の関係はいつでも「一・無限」だ。しかし、そのように客体と対峙しひとり立つ人間も、僅かな仕掛けで主体そのものを失ってしまう何とも不安定な存在なのだろう。そうだ、世界はそんな主体と客体が相互作用を繰り返す、普遍的な危うさの上に成り立っているのだ。僕はそんな事を考えていた。

この演劇は、構造が複雑で全体を俯瞰した者は誰ひとりいない。僕もただの芝居の小道具になって、あそこで右往左往してただだったのかも知れない。

芝居が終わわり屋外に目をやると、寺山修司のポर्टレイトが「君たち、随分不器用だったね」と、ハタハタと笑っているような気がした。

※写真はすべて山口郁生氏（10月4日撮影）。

（写真家）



「寺山修司●劇場美術館
1935-2008〈私さがし〉と〈世界さがし〉」
会 期：2008(平成20)年9月13日(土)～
10月19日(日)

主 催：郡山市立美術館
特別協力：三沢市寺山修司記念館、九條今日子
企画協力：テラヤマ・ワールド
展示協力：演劇実験室●万有引力

この展覧会期間中、階段ホールにおいて、演劇実験室●万有引力による特別展示「釘と螺旋の算術法、あるいはその起源」が同時開催され、同劇団による「100万光年の彼方劇=劇的小道具序説」が10月4日、5日に上演された。また9月14日、21日、28日には福島市在住の元天井棧敷劇団員で万有引力劇団員の根本豊氏による「根本豊ときどき公開ワークショップ&万有引力公演体験参加」(報告は6頁)も開催された。また、会期中には寺山修司が残した映像作品のほとんどが上映された。



根本氏と豊かな感性と遊ぶワークショップ

早瀬 きみよ



根本氏(左)

「と思っています。」と言。ワークショップには、赤ちゃん、中学生から七十代、既婚未婚交えて老若男女、職業も国籍も様々な人々が参加している。およそ一ヶ月、寺山修司の世界観を通じて、根本氏とワークショップ参加の人々と郡山市立美術館と遊ぶ。今この時に「一緒に過ごした人と、貴重な体験を味わった。」

ワークショップは三時間あまり。身体訓練や活元で自分や他人の身体に耳を澄ませ、呼吸法で、普段あまり意識しない呼吸の深さや、身体の中の部分を使って呼吸をしているか、どこに空気が通っているかを感じた。発声法では、響きの気持ちのいい声、悪い声に気が付いたり、呼吸が身体はどこに触って声が出ているかを探求したり。そんな風にして一日目は、じっくりと身体というものに出会って遊んだ。二日目は、それに、いくつかの演劇メソッドが加わる。自分や、他人の動きをまじまじと見る。反射的に出た動きや言葉に、皆思わず笑いが漏れる。興味深かったのは、音が伝染していく

「私が、いわゆる、寺山修司です。」寺山修司の仮面を被って登場した根本氏が自己紹介をし、毎週日曜三日間の演劇ワークショップが始まった。それは、寺山修司の世界観、その「一部である「天井桟敷」、その後生まれた「万有引力」という劇団、両劇団の主力俳優・演出家の根本氏の「ひとかけら」との出会いになった。「最終的に、四週目の土曜日と日曜日には万有引力特別公演への参加がありますが、このワークショップでは、お客さんに見せることよりも、皆さんと一緒に遊ぼう

「伝染箱」と「闇学」。一寸の光ももらさずに真っ暗闇をつくる「完全暗転」には特に気を配った。何一つ見えない真っ暗闇なのに、痛みもそつちのけで走り回ってみたい衝動に駆られた。皆で人を指差し見ながら、「ニヨ」「ニヨ」と言う「噂のフォークロア」では、なんともいえない気分になったり。「演劇メソッド」らしくからぬ「演劇メソッド」。「メソッド」って言うのは「教わる」ものじゃなくて「掴む」ものだ」との言葉に、日常の出来事の中に「ニヨ」と隠れている幾つか、ふっと顔を覗かせた。「感じたことや、思っていることを言葉にするのは難しい。こうして話しているても実際は半分も伝わらない。書き言葉に直したら更にその半分も伝わらない。」ワークショップの中で何度か耳にした言葉。

一ヶ月の郡山通いは本当に楽しかった。今度はどうなことをするのだろうか。一ヶ月間毎週ワークショップ。通う電車で見える夢も、帰るまでいい夢を見ているような感。目が覚めて、街を眺める。今という日常が、前より立体化して見えるようだ。テレビ放送のインタビューの中で、寺山氏を振り返り、「一緒にいると、何かろくでもないことが起るんじゃないかと、ワクワクした。」と語っていた根本氏。一ヶ月間の自分の「ワクワク

ク」を思い出した。このワークショップを通じて、根本氏から、いろんな感覚で「寺山修司との出会い」という活きた美術品に、出会わせていただいたように思う。次に出会う時、「何かやりたいこと」を次々「こうかん」でできるような、やわらかな遊び心を持っていたいと日々思いつつ。白昼に隠れたまんまで何一つ見えていない、まだたくさんの「知らないこと」「分からないこと」「伝わっていないこと」との出会いを楽しみに、ワクワクと暗闇を痛みもそつちのけで走り回りたい。そういう「みちなき荒野」に出会えたワークショップだった。



根本氏を中心に精神統一

「ノスタルジア 11.11.11 郡山市立美術館のイギリス美術」展

平成20年10月11日から福岡県久留米市の石橋財団石橋美術館でスタートした同展は、郡山市立美術館の誇るイギリス美術を体系的に紹介する展覧会です。これは、郡山市立美術館と石橋美術館との交換展として実現した展覧会です(12月14日まで)。ほとんどの作品が館外初出品となる今回の展覧会。当館の常設展示でも、これだけ粒ぞろいの作品が勢揃いすることはありませんでした。久留米市の市民をはじめ多くの方々に、郡山の誇るイギリス絵画の魅力を十分にお楽しみいただける機会となればと願っています。(当館主任学芸員 佐藤秀彦)



Report

郡山市・ブルメン市姉妹都市提携20周年記念「オランダ絵本作家展」

平成20年7月5日(土)～8月31日(日)

ディック・ブルーナをはじめ、現代オランダの絵本の原画を中心に紹介した展覧会。本展では「ブルメン市写真展」も併設され、郡山市とブルメン市との友好関係も紹介されました。

会期中は、翻訳家で本展監修者の野坂悦子さんによる講演会(7月19日)や出品作家のイヴォンヌ・ヤハテンベルフさんと野坂悦子さんによるワークショップやアーティストトーク(8月2日、3日)をはじめ、郡山市内の読み聞かせ会によるおはなし会など、様々なイベントが開催されました。



郡山市・ブルメン市姉妹都市提携20周年記念事業 郡山市音楽都市宣言記念事業 ルイ・レーリンクのおしゃべりコンサート

平成20年8月30日(土)

ルイ・レーリンクさんの軽妙なおしゃべりとともに、なじみのあるピアノ曲の演奏で、優しさにあふれるコンサートでした。



音楽と詩の朗読の会『だいすき』

平成20年7月20日(日)

ハンス&モニック・ハーヘン作、マーリット・テークヴィスト絵による『だいすき そんなきもちをつたえてくれることば』を、野坂悦子さん、木坂涼さん(詩人)が、佐伯恵美さん(音楽家)の音楽にのせて朗読してくださいました。(協力:和泉さん、影山さん)



朗読会／親から子への朗読会

平成20年7月5日(土)、12日(土)、26日(土)、8月10日(日)

共催の福島テレビのアナウンサーの方、観客との掛け合いもあるとても楽しい朗読会でした。テレビでは決して見せないアナウンサーの横顔も披露してくれて、観客は皆大満足でした。



小学生向け楽しい造形ワークショップ 「こどもの木、森、山」

平成20年10月12日(日)

美術家の佐藤陽香さん、渡邊晃一さんを講師に迎え、福島大学の学生さんたちと一緒に、紙を使って木を作りました。その木はどんどん増えて、森、山へとなくなりました。



ワークショップ 「初心者のための伝統木版画」

平成20年10月11日(土)、18日(土)

星博人さん(版画家)のご指導のもと、日本ならではの木版画制作に取り組みました。



風土記の丘発 「図工&美術の時間へようこそ!」

平成20年8月9日(土)、10日(日)

市内の小中学校の先生が講師となり、自由参加の受講者の方々に実際の授業内容を体験していただきました。



先生のためのワークショップ 「トリックアート からくりボックスを作る」

平成20年8月7日(木)

郡山市内の小中学校の先生を対象に、造形作家、斎藤真紀さんを講師に迎え、「おびからくり」の原理を利用した絵本やからくりボックスを制作しました。

「布ものがたり」

～三瓶清子コレクション～

古布や着物のコレクションとして全国的に知られている三瓶清子さん(郡山市在住)は、長い歳月の間に古裂に深い愛情を注ぎ、生活に根ざした布の在り方に心を



からむし織の反物と上布

寄せてきました。本展では、膨大な三瓶コレクションの中から、幕末から明治、大正期の木綿や麻を中心とした布の世界をご紹介します。今では作り手がほとんどいなくなった、苧麻織（おんあし）、貴重な木綿の晴着や風呂敷、古更紗や型染めの着物や布、余り糸で織った「やたら織」など、いずれも人々の手仕事の妙と生活の記憶が息づく布たちです。

「むかしの人たちが大変な思いをして作った布だと思つと、たとえ端裂でも私には捨つられないのです」と語る三瓶さん。今回はそつとした思いが形となった、古裂を縫い寄せて生まれた袱紗や着物なども紹介します。時を越えかたちを変えながら豊かなものがたりを紡いでいる布の世界をどうぞおたのしみください。 永山多貴子(当館学芸員)

会 期：平成21年2月7日(土)～3月22日(日)

開館時間：午前9時30分～午後5時まで

(入館は4時30分まで)

休館日：毎週月曜日

観覧料：一般500(400)円、

高校生300(240)円

※()内は20名以上の団体料金。中学生以下、65歳以上、障がい者手帳をお持ちの方は無料。

佐藤静司寄贈作品展

1915(大正4)年、郡山市に生まれた彫刻家・佐藤静司氏は、93歳の現在でも日展を中心に活躍し、郡山市フロンティア大使としても知られています。平成18年度には、当館で「佐藤静司彫刻展」を開催しましたが、このたび、その出品作品の中から、新たに郡山市内の各施設へ14点の作品をご寄贈いただくことになりました。ここにそれを記念して展覧会が開催されました。

会 期：平成20年11月11日(火)～11月16日(日)

会 場：市民ふれあいプラザ展示室(ビッグ・アイ6F)



右から原市長、佐藤氏(11月11日)

常設展示のご案内

■12月27日(土)まで

展示室1 モノトーンの世界
—イギリス版画の魅力—

展示室2 南を描く

展示室3 郡山の美術家たち

展示室4 楽しい本の世界

クリストファー・ドレッサーと日本

■平成21年1月20日(火)から

展示室1 近代イギリスの油彩画

展示室2 冬の風景

展示室3 アートの広がり—近代から現代へ—

展示室4 版画の中の着物

暮らしの中の工芸

カフェ「フローラ」

カフェ「フローラ」の新メニューをご紹介します。定番の「チキンカレー」と「ポークカレー」といったカレーに新しいメニューが登場しました。その名も「オリエンタルカレー」。ベースは、フローラ独自にブレンドしたスパイス、隠し味にココナツミルクを使用。酸味と甘みとほどよい辛さが絶妙にマッチし、エキゾチックな気分!

ティータイムには、王族たちが来訪するヨーロッパの有名なスパリゾートの最高級ホテルにも広く支持されている、180年の歴史ある紅茶を、芸術の秋景色とともにいかがでしょうか?



□営業時間/10:30～18:30
□オーダーストップ/18:00

TOPICS

○休館のお知らせ

年末年始及び館内消毒のため、平成20年12月28日(日)から平成21年1月19日(月)まで、休館とさせていただきます。

○雪村周継筆「四季山水図屏風」特別展示

平成21年1月20日(火)～2月1日(日)

郡山市立美術館 〒963-0666 福島県郡山市安原町字大谷地130-2
Koriyama City Museum of Art TEL:024-956-2200 FAX:024-956-2350

郡山市立美術館ホームページ <http://www.city.koriyama.fukushima.jp/bijyutukan/>